流浪の執行官

Trumical

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シビュラシステムの中枢で
公安局局長の禾生壌宗（カセイ　ジョウシュウ）により
ドミネーターのデストロイ・デコンポーザーモードで
撃たれたはずの縢秀星は
ブラック・ブレットの世界で目覚める
使えなくなったドミネーター、
ガストレアという謎の化け物に脅かされる世界、
モノリスによって守られた仮初の平和を享受する世界で

元猟犬は何を思い、何のために戦うのか
元執行官の第二の人生が始まる

目次

プロローグ ―――― 1
第一章　第二の牢獄
登場人物紹介 ―――― 4
第1話：目覚めた世界は… ―――― 7
第2話：この世界での友 ―――― 11
第3話：天童民間警備会社 ―――― 17
第4話：ライセンス入手!? ―――― 21
第5話：滕ペア誕生 ―――― 25
第6話：ドミネーター復活 ―――― 29
第7話：初の実戦と現れる道化師 ―――― 33
第8話：束の間の平和 ―――― 38
第二章　偽りの平和と道化師
登場人物 ―――― 42
第9話：嫌な予感 ―――― 46
第10話：近付く災い ―――― 51
第11話：奪われた鍵 ―――― 56
第12話：探索と合流 ―――― 61
第13話：戦闘開始 ―――― 67
第14話：地獄と光の槍 ―――― 72
第15話：撃破 ―――― 78
第16話：スコーピオン、沈ム ―――― 83
第17話：等価交換 ―――― 87

プロローグ

槙島　聖護（まきしま　しょうご）という希代の大犯罪者を追い詰め、そして捕まえるため執行官である俺、縢　秀星（かがり　しゅうせい）とコウちゃんこと狡噛　慎也（こうがみ　しんや）、そして監視官である朱ちゃんこと常守朱（つねもり　あかね）は厚生省ノナタワーに来ていた。

監視カメラの情報により敵が二手に分れたことを知り、俺たちも二手に分かれて敵を追った。ちなみに俺は一人で地下に向かった敵を追う担当だ。

そして俺は、厚生省ノナタワー地下秘密区に入った。敵にシビュラシステムの中枢がここにあると言われ、敵の手下を始末しながら一番下の階層まで降りてきていた。

敵の手下を始末し、満身創痍ながらも大きな扉の前に立つ。

扉は既に開かれておりハッキングが終わり用済みになったノートパソコンが置き去りにされている。

「……」

俺はよろよろと脚を引きずりながら、扉の中へと踏み込む。中には敵のハッカーであ

るゲス野郎（チェ・グソン）が単発ガス圧銃を手に持ち呆然と立っていた。部屋を見回し俺は言葉を失った。

「……何なんだ、こりゃ……」

俺のこの言葉にゲス野郎が答えた。

「こいつが……シビュラシステムの正体だ」

シビュラシステムとは、サイマティックスキャンにより読み取った生体力場を解析し、人間の心理状態や職業適性や深層心理などを分析数値化することで、従来は目に見えなかった心の健康状態を診断し、適性や能力に見合った職業を提案し、趣味嗜好に沿った新しい娯楽を提示するなどして、人々がより充実した幸福な人生を送れるよう支援する生涯福祉支援システムのことだ。

ゲス野郎は突然笑い出し叫んだ。

「この手でぶち壊すまでもねぇ……こいつを世間に公表すれば、この国はおしまいだ！今度こそ本当の暴動が起きる。もう誰にも止められねぇ！」

俺はふと何者かの気配を感じ振り向くとそこにはドミネーターをゲス野郎に向けた公安局局長の禾生　壌宗（かせい　じょうしゅう）が居た。

それに気付いたゲス野郎は銃を構え、局長と同時に発砲する。チェ・グソンはドミネーターのリーサル・エリミネーターにより即死だ。

「きょ、局長!?」
俺は驚いた。ガス圧銃から発射された濃硫酸をまともに受けた局長の腰から下が溶解し出したからだ。しかし、解けたからだから見えたのは機械だった。
「……あんたは……」
局長は壊れたロボットのような動きで俺にドミネーターを向ける。ドミネーターは一旦、ノンリーサル・パラライザーになるが突然、何故か分子分解銃であるデストロイ・デコンポーザーに変わる。
俺はその様子を見て笑みを浮かべる。
「……やってらんねーよ、くそが」
そう言った直後、俺はドミネーターから放たれた光に包まれる。
こうして、俺は人生を終えた……筈だった。

第一章　第二の牢獄

登場人物紹介

☆滕　秀星（かがり　しゅうせい）［今作の主人公］

２１歳、元公安局刑事課一係所属執行官

シビュラの中枢にて公安局局長である禾生　壌宗（かせい　じょうしゅう）にドミネーターのデコンポーザー・モードで撃たれた。しかし、目が覚めるとそこは見知らぬ世界であった。武器はドミネーター。

・ドミネーター

携帯型心理診断鎮圧執行システム。大型の拳銃の外見をしており、登録された監視官と執行官だけが使用可能。低殺傷弾を撃ち出すパラライザー、殺傷弾を撃ち出すエリミネーター、最大威力の分子分解銃のデコンポーザーの三種のモードがあり、パラライザー以外では銃が変形する。犯罪係数の計測にはシビュラシステムにリンクする必要があるため、電波遮断区画などのオフラインとなるエリアでは使用が出来なくなる。

☆祀　知空（まつり　ちそら）

１０歳、モデル・ムーンベアのイニシエーター。滕の相棒。滕に初めて会った時、自

分を助けてくれた彼に憧れを抱き彼のイニシエーターとなる決意をする。普段は心優しくあまり戦いに参加しないが怒るとかなり危険。武器は基本的に小太刀、本気（激怒）時は大剣。

☆里見　蓮太郎（さとみ　れんたろう）
１６歳、勾田高校２年生。天童民間警備会社のプロモーター。普段は４０口径仕様のＸＤ拳銃と天童式戦闘術で闘う。ＩＰ序列は１２万３４５２位。

☆藍原　延珠（あいはら　えんじゅ）
１０歳、モデル・ラビットのイニシエーター。蓮太郎の相棒。司馬重工製の特殊な靴を履いており、靴底に仕込まれたバラニウムと延珠の脚力を加えた蹴りは強固な甲殻に覆われたガストレアをも粉砕するほどの威力を持つ。

☆天童　木更（てんどう　きさら）
１６歳、天童民間警備会社の社長。天童式抜刀術の免許皆伝の剣鬼。抜刀術では刀が触れもしない１０ｍ先の物まで切断できる。

☆室戸　菫（むろと　すみれ）
年齢不詳、四賢人と謳われた世界最

高の頭脳を持つ天才の1人。「神医」という二つ名も持つが、現在は重度の引きこもりにして死体愛好家。

☆司馬　未織（しば　みおり）

勾田高校生徒会長。世界に名立たる巨大兵器会社・司馬重工の社長令嬢。一目見た瞬間から連太郎が将来大物になると感じ、パトロンとして蓮太郎・延珠ペアの装備品を条件付きで無償で提供している。木更とは犬猿の仲で、同じ空間に置いておくと撃ち合い・斬り合いの喧嘩になる。

☆聖天子（せいてんし）

16歳、東京エリアの3代目統治者。木更と同じ美和女学院に在籍しているが、統治者としての多忙さから滅多に登校できない。しかし、首席を取るほど学力は高い。

参考：Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

第1話：目覚めた世界は…

　俺は見覚えのない場所に倒れていた。
「ん……ここはどこだ？俺は局長に打たれたはずじゃ」
　俺、滕秀星はあの時シビュラシステムの中心で局長のドミネーターのデコンポーザーで殺されたはずだ。何故俺は生きているんだ。そう考えつつも起き上がり辺りを見渡した。
「おいおいおい、なんだこりゃ、ここどこだよ」
　俺が見たのは巨大な黒い壁（後から聞いた話だとモノリスというものらしい）が聳え立っていた。俺の格好はあの時と変わらずいつものスーツだし、ドミネーターも持っている。何故か怪我は無くなっていたが……。無理だとわかりつつもドミネーターの通信確認するが、
〈通信エラー、システムとのリンクを構築できません〉
　と返ってくるだけだ。
「そうなるよな。マジでここどこだよ。シビュラシステムのなかでもねぇしまず俺がいた世界と違う気がすんな」

そう考えていたら、ツンツンと足を突つかれた。振り返るとそこには黒髪の可愛らしい少女がいた。
「お兄さん誰？なんでここにいるの？」
「いや、俺もしらねぇよ。お前はここが何処か知ってんのかよ。」
「ここは外周区ですよ。お兄さんはそんなことも知らないの？」
「うっせーよ、こちとら何も知らねぇとこにいきなり連れて来られてんだよ。」
少し声を荒げてしまった……、我ながら情けないと思ってる、だからこそ謝ろうとして振り向いた時、俺は焦った。なんと少女が泣いていたのだ。
「そんな、怒らなくても……いいじゃないですかぁ」
うえぇぇぇんと大声で泣かれ正直焦っている。こっちは五歳の時から隔離されているため、あやし方など全くわからない。血生臭い世界で猟犬をしていたのだ、子供などと滅多に触れる機会なんて無かった。そうして焦っていると何かの気配がした。気配を感じた方を見ると瓦礫の影から大きな蜘蛛のような生物が現れ襲って来た。俺は反射的にドミネーターを向けるも
〈通信エラー、システムとのリンクを構築できません〉
と返ってくるだけだ。ちっ、このポンコツがっ、と心の中で悪態をつき、逃げようとすると

「が、ガストレア……いやぁぁあ」
　と少女は叫び、その場にへたり込んでしまった。ガスト……レア……あの化け物の名前か？いや、今はそんなことはどうでもいい、
「おい、逃げんぞ」
　声をかけても動かない少女を見兼ねた俺は少女をお姫様抱っこのように抱え上げ走り出す。「昔の俺じゃこんなことしねぇのに…、これも朱ちゃんのせいなのかね」などと下らないことを考えて逃げていたが、化け物に追いつかれた。
「柄じゃねぇことするもんじゃないよな。あの子だけは逃がすか」と考え、
「おい、お前だけで逃げろ。もう立てんだろ？ここは俺に任せろよ」
「でも……」
「でもじゃねぇ、逃げろ！」
　少女はまた怒鳴られビクッと驚いたがすぐに走って逃げていった。これであの娘は逃げれたな……なんで自分が死にそうってのに俺は……。
「あ～あ、折角生きてたのにまた死ぬのか～、本当に柄じゃねぇよ。次目覚めるとなんになんだろな」
　などと自嘲気味に呟き、俺は死を覚悟し目を閉じた。しかし、いくら待っても死は訪れなかった。不思議に思い目を開けると先程まで化け物であった肉塊が目の前にあっ

た。
「大丈夫か？」
　不意に何者か問いかけられる、俺は反射でそいつにドミネーターを向けたが
〈通信エラー、システムとのリンクを構築できません〉
　と返ってくる。ちっ、わかってんよと心の中で思いながらそのまま構える、そこには学生と思われる青年と小学生くらいの少女が立っていた。
「おいおい、俺はお前を助けてやったんだぜ。そいつを下ろしてくれよ」
　両手をあげ、笑いながら青年は言った。
「じゃあ、お前があれをやったのか？」
「ああそうだ、まぁ正確には俺たち、だがな。俺は里見蓮太郎だ。んで、こっちが……」
「妾は藍原延珠、蓮太郎と愛を誓い合った仲だ」
「嘘を付くんじゃねぇよ」
「嘘ではないであろう？」
　助けてもらっておいてなんだが、これは犯罪じゃねぇかとか考えていると、今までの疲れのせいか目眩がしだした。遠くで、二人の声が聞こえる、まぁ助かったんだ少し寝ようと考え、俺は気を失った。

第２話：この世界での友

見覚えのない部屋で俺は目覚めた。
「目覚めたようだね」
声がした方に顔だけ動かすとそこには白衣を着た女性が立っていた。なんとなく雰囲気が先生こと唐之杜　志恩に似ている気がする。
「あんたは？」
「私は室戸菫、そしてここは私の研究室だ。君は訳ありみたいだからと蓮太郎くんがいきなり連れて来た時は驚いたが、なかなか興味深いねぇ。特にこの銃、喋るなんて本当に面白い。これは何なんだい？」
ドミネーターを触られてしまった、まぁ、今じゃもう使えないが……。ただ、ドミネーターがわからないってことは本当にここは違う世界なのか……。
「そいつはドミネーターっていう銃だ。今じゃもうただの鉄くずだけどな」
「ほう、ドミネーター……知らないな。何故もう使えないんだ？」
「そいつは大本の機械と通信してないと使えないんだよ。今はもう通信ができないから使えないんだよ」

俺は機密を隠しつつ答えた。もちろん大本は機械じゃない人間の脳の集合体だったけどな、という言葉は言わなかった。
「興味深いねぇ、調べさてもらえないかい？」
「ダメだ」
いくらここが違う世界だとしても見ず知らずのやつに見せる訳にはいかない。
「いいじゃないか、減るものじゃあるまいし」
「だからダメだ」
このような会話を繰り返していると、
「おっ、目が覚めたみたいだな」
と声が聴こえてきた。声の主は昨日の青年だった。今日はあの少女はいなかった。
「お前は確か……里見蓮太郎だったよな？今日は嫁さんいないのか？」
「延珠はただの居候だ、嫁なんかじゃねぇよ。からかうんじゃねぇ」
「いいじゃねぇか、こっちはわけわかんないとこでわけわかんない化け物に襲われて疲れてんだよ」
「さて、里見くんも来たし丁度いいだろう。単刀直入に聞こう、君は何者だい？」
俺は、この問いにどう答えるか迷う、とりあえず名は名乗っておこうか。
「……俺は滕秀星だ」

「滕ね。んで、どっから来たんだ？なんでまたあんなとこに」
「……ここではない別の世界から来た」
　この言葉に蓮太郎の顔がひきつった。嗚呼、こりゃ完璧に電波だと思われてるな。
「なんてな……今、俺のこと電波か何かだと思ったろ？」
　そう笑いながら里見に話しかける。里見はこの言葉に若干苛立ちながら、
「おいおい、俺は真面目に聞いてんだ、ちゃんと答えてくれよ」
　と返してきた。そこへ室戸菫が割って話しかけてきた。
「蓮太郎くん、さっきの滕くんの言葉だがあながち嘘ではないと思うよ。少なくともその可能性を否定することはできない」
「はぁ？先生あんた何言ってんだ。単にからかっただけだろ？大体あんなことを真面目に言ってたらどう考えても嘘か頭逝っちまったやつの妄想だろ」
「はぁ、やっぱり君は頭の出来がよろしくないね。見慣れない、明らかにオーバーテクノロジーな銃、そしてガストレアに関して全くの無知、この時点で彼は隔離された施設または異世界のようなところから来たという可能性は大いに考えられるよ。どちらにせよ、少なくとも一般人ではないね。異世界というのは簡単に信じられるようなものではないが」
　流石、お医者さまだな。まっ、これだけの情報があれば考えつくことはできるか。

「いや……本当はそれが真実だ。まぁ、無理に信じてくれとは言わねぇけどよ。戯言だと思ってくれてもいいよ」

俺の口調と様子から二人とも少しは信じてくれたようだった。里見は明らかに渋々という顔をしてるが。

「……まぁ、確かにそうかもな。別の世界から来たようなやつじゃなきゃ、モノリス周辺に居るわけがねぇ。自殺志望でもねぇだろ？」

「当たり前だっつーの。自殺なんかしやしねぇよ」

まぁ、あっちでデコンポーザーで撃たれる時は確かに諦めていた節はあるが……。

「そうか……本当に別の世界から……信じられねぇけどそうじゃなきゃ説明つかねぇもんな、特にそのドミネーターっつう銃はよ」

やはりドミネーターは俺の話を信じさせる鍵になるようだ。

「いやいや、興味深いねぇ。私は君にも興味が湧いてきたよ」

「今は黙っててくれよ、先生」

室戸菫は一瞬不満気な顔をしたが渋々と言った感じで黙った。なんだかその様子がギノさんやコウちゃんに仕事押し付けられて不貞腐れていた先生に似ていて内心笑ってしまう。

「なぁ、お二人さん。俺にこの世界のことを教えてくれよ」

いつ戻れるかも本当に戻れるかもわかんねぇ。だからこそこれから生きるであろうこの世界の情報が必要だ。
「いいぜ。先生も協力してくれよ」
「わかったよ」

こうして、数時間かけ簡単にだがこの世界のことを教えてもらった。
「ガストレアに民警にモノリスだ？頭痛くなってきた。……本当にここは全く違う世界なんだな……。なぁ、里見は民警なんだろ？」
俺がいた世界とは全く違う……似てんのは〝善良な市民〟ってのが何も考えずのうのうと暮らしてるとこだな。
「ああそうだぜ。あと俺のことは蓮太郎でいいぜ」
「とりあえず、情報を集めるには民警になったほうがいいみてぇだから民警やろうと思う」
「そうか……わかった、ライセンスとかあるけどまずはうちの会社来いよ」
「今からか？」
「ああ、今からだ。ほら、行くぞ」
「ったく、俺は疲れてんだって。まぁ、わかった行くぜ」

こうして俺は先生にお礼を言い蓮太郎が務める天童民間警備会社へ向かうことになった。

第３話：天童民間警備会社

「ここが天童民間警備会社ねぇ……な～かなかいい立地じゃねぇの～」
「皮肉はよせよ。この立地には俺も不満があんだ」
　俺は天童民間警備会社に来た。来たのだが、一階がキャバクラ、二階がゲイバー、三階に天童民間警備会社、四階に闇金というブッとんだビルの中にあった。最悪だ……マジで。
「ほら行くぞ、滕。わかってると思うが今更行かないなんていうのはなしだぞ」
　蓮太郎がニヤニヤしながら言ってきた。こいつ楽しんでやがるとか思ったが、俺は渋々行くことにした。三階に上り部屋に入ると制服を着た女性に声をかけられた。
「貴方が　滕さんね。私は天童民間警備会社社長の天童木更よ。よろしく」
　黒髪のかわいい嬢ちゃんだな。だが、瞳に憎しみの炎が見え隠れしてる。
「おう、俺は滕秀星だ。よろしくな」
「早速だけど、貴方民警になりたいんでしょ？なら、うちの会社に入ってくれない？うちの社員は里見くんのペアだけでしかも里見君が甲斐性なしのせいで全然稼ぎがないの。だから貴方に入ってもらえると嬉しいんだけど」

随分と話がはやくて助かる。まぁ、急いでるってわけじゃねーが。
「いいぜ、どのみち情報収集にはどっかの民警に入らねぇとって思ってたからな」
民警の話を聞いてからずっとそう考えていたのだ。この提案は断る理由がない。
「本当に！ありがとう。じゃあ、まずライセンスを取らなきゃね」
「はっ？ライセンスなんてあんのかよ」
聞いてねぇ、よくよく考えればわかったかもしんねぇが執行官は適正でなれたかんな。
「ええ、そうよ。まぁ、君なら大丈夫じゃないかしら」
「んな、簡単に……まぁ、やってやろうじゃないの」
「ちょっといいか」
突然、蓮太郎が話に入ってきた。
「なんだ、蓮太郎。俺がこの嬢ちゃんと仲良く喋ってるもんで嫉妬したか？」
蓮太郎は多分この嬢ちゃんが好きだな……いじりネタができたな。
「ばっ、ち、ちげーよ。んなことよりお前の武器だ、武器」
「話逸らしやがったな。まぁ、いいけどよ。で、俺の武器が何だ？」
「その銃、ドミネーターだったよな？そいつを使わないのか？今は使えないようだけど、俺のツテを使えばなんとかなるかもしんねぇ」

「マジかよ……そのツテってのは？」
　その提案は願っても無いことだが、ドミネーターの情報を無闇に広げるわけにはいかないのだ。
「二つあるんだが、一つは室戸先生だ。あんな人だけど研究者としてはかなり凄い人だよ。もう一つは司馬重工、俺や延珠の武器を作ってもらったりしてるところだ。信用はできるぜ」
「俺としてはこいつが使えるなら願ってもねぇが……一つ条件がある。こいつを解析してもデータは抹消してもらいたい。俺は頼む側だし図々しいことを言ってるのもわかってる。でも、この条件だけは譲れねぇ」
　正直、ドミネーターの情報を無闇に広げる訳にはいかない。しかし、ガストレアは未知の相手だ、できれば馴れ親しんだ武器で戦いたいのだ。残念ながらおそらく断られるだろうと思っていたのだが蓮太郎はその予想を裏切った。
「……わかった、俺がなんとかする」
「マジかよ。……蓮太郎、ありがとよ」
　おそらく蓮太郎は情報を消すとはいえ未知なるドミネーターについての情報を欲しがっているのだろう。だからこそ、多少無理なこの要求も？んだのだと思う。
「気にすんなよ、これからは仲間だろ？」

どうやら半分はお人好しのようだ。

「そうよ、貴方はもう私達の仲間だわ。その頼みを断るなんてできないわよ。まぁ、とりあえず今はライセンスの取得を目指しましょ！早く取って働いてもらうわよ」

この言葉に対して働かせたいだけじゃねえかなどと思ったが、俺は二人に感謝しながらこの先のことを考えていた。

この日、俺は天童民間警備会社への入社が決定しライセンス取得のため大嫌いな勉強の日々の開始が決定した。

だが、この後以外にも早くライセンスを取れることになる。それはまた別のお話。

第４話：ライセンス入手!?

　天童民間警備会社に入社して数日がたったある日、俺はこの東京エリアの統治者である聖天子に呼び出された。そして今、聖天子が居る聖居にいる。
「しっかしよ～、モノリスの近くは荒れて大変だってのにここはバカみたいに綺麗なんだな。上の人間ってのは結局下を見ない人間なのかねぇ」
　こう一人で呟いていたら急に背後から声をかけられた。俺はすぐに振り返る。そこには可愛いではなく綺麗という言葉が似合う嬢ちゃんが立っていた。
「私はそのようなつもりでここに住んでいるのではありません。私はすべての人にとって平等で平和な世界を目指しているのです」
　最近よく後ろを取られるようになったなとか思いながら俺は後ろに立っていた嬢ちゃんに問いかけた。
「誰だ……ってあんたが聖天子か？あちゃ～、聞かれちまったよ」
「そうです。私が東京エリアの統治者、聖天子です。貴方の言うこともわかります。しかし、今は仕方がないのです。現在、先の大戦の復興がやっと終わりつつありますが、今だモノリス周辺の復興は難しいのです」

「それで復興かよ。じゃあ、まずお前がこの聖居から出て普通の生活をしてみろよ。あんたがただの上の人間じゃないならそんなこと簡単にできるだろ」
「そ、それは……」
結局、そういうことなのだ。上の人間は下を見ないし、どんな綺麗事を話そうが下の人間に立つことなどできない、保身に走る奴らばかりだ。俺だってそーゆー理由でデコンポーザーで撃たれたのだろう。
「ほらな、お前もそういう人間なんだよ、結局。……で、用は何だよ」
「……貴方のお噂は訊いています。何でも、民間警備会社のプロモーターを目指しているそうですね？ですから、交換条件としてライセンスを差し上げる代わりに貴方の知っている情報を教えてもらいたいのです」
願っても無い条件だ。ただ、条件が美味しすぎると俺はこの提案に疑いを持った。こういうのには必ず裏がある。
「拒否したら？」
「貴方は一生、プロモーターになれなくなります」
はぁ、めんどくせぇことしやがんな。
「ったく、卑怯な真似すんなぁ。まぁ、喋れることは殆どないけどよ。それでもいいのか？」

「ええ、構いません。今は情報が欲しいのです」
「いいぜ、その交換条件のんでやる」
　こうして俺は聖天子に秘密としている以外のことを話した。ただ、ドミネーターについては一切話さなかった。あれはこの世界においても恐ろしい物だ。あまり情報を広めたくない。少なくとも改修が終わるまではこの情報を漏らすわけにはいかない。
「そう……ですか……。とても、興味深いお話ありがとうございました」
「あんま、いい情報なかったって顔してるぜ。そういうのは隠せよな」
　と言うと何故か聖天子は黙ってしまった。不思議に思い、俺は聖天子に問いかけた。
「何で、黙ってんだよ」
「いえ、貴方のようにはっきりと物事を述べる人は初めてで……」
「そうかよ。……滕秀星だ」
「えっ？」
　聖天子は素っ頓狂な声を出す。俺はいつも冷静そうな聖天子があんな声を出したのに対し笑をこらえるので必死だった。どこか朱ちゃんに似ているような……まぁ、気のせいだな。
「俺の名前だっつーの」
「それは存じていますが……」

「名前で呼べってことだよ。貴方なんて呼ばれんの寒気がすんだよ」
実際そうなのだ。さっきから少し気分が悪い。
「あっ……はい、滕さん。今日は本当にありがとうございました」
お礼か……俺は執行官の時、誰かにお礼を言われたことがあるだろうか……。
「あいよ。じゃあ、俺は帰るぜ」
こうして、俺は帰路についた。交換条件として、受け取ったライセンスを持って。こうして、俺は民警として働けるようになった。これで情報を得ることができる。民警になるにはイニシエーターが必要であり、慌ててＩＩＳＯへ向かうのはまた後の話である。

第５話：滕ペア誕生

俺は今、ＩＩＳＯのイニシエーター紹介所にいる。今は紹介待ちの状態だ。

「こんな長く待たされるとかきいてねーっつーの。こんなことならゲームかなんか持ってくりゃ良かった」

などと不満を漏らしていると、ようやく呼び出された。別室に移動しこれから俺のイニシエーターとなる少女と会った時、俺は驚きのあまり一瞬思考が停止した。なぜなら、俺のイニシエーターがこの世界へ来て最初に話し、そして助けようとした少女だったからだ。

「お、お前は……」

「お久しぶりです。私は祀知空、モデル・ムーンベアです。貴方のお名前は？」

あの時とは違い落ち着いた雰囲気で言った。

「あ、あぁ、俺は滕秀星だ。なんでお前がここに？イニシエーターならなんであの時戦わなかったんだ？」

「えっと……あの時はまだこの紹介所の人間ではなかったので。でも貴方に、滕さんに助けられてまた滕さんに会いたいって思ったんです。そしたら滕さんが、民警を目指し

てるって聞いて、ここに来れば滕さんに会えるって思ったんです。あの時は本当にありがとうございました」

俺が人を変えるとはねぇ……昔じゃ考えられねぇよ。執行官は忌み嫌われることはあれど感謝されることは無かった。

「あぁ、それはいいんだが…。他のプロモーターに当たる可能性もあったんじゃねぇのか？」

「はい。ですから聖天子様に滕さんのイニシエーターにしてもらえるよう直談判しました」

「あ～、直談判ね……って、はぁ？何やってんだよ、殺されてもおかしくねぇぞ」

「はい。実際親衛隊の方々に殺されかけましたが、なんとか聖天子様にたどり着き、保護してもらいました」

おいおいおい、こいつは馬鹿かよ。普通そんなことしねーっつーの。ガッツは認められるが後先考えずつっこむなんざおそろしいな。

「はぁ、ったくすげーなお前。……わかったよ、これからよろしくな、相棒」

そういうとこの少女は頬をぷくっと膨らませ、不満気な顔を向けてきた。何故だ？

「な、なんだよ？」

「名前」

「はっ？」
「〝相棒〟じゃなくて、私の〝名前〟で呼んでください」
「なんでそんなこと」
と不満そうに言うと、少女はまた泣き出してしまった。俺なんか悪いこと言ったか？
「名前で、呼ぶくらいいいじゃないですかぁ」
ヤバい。周りの目が痛い。とても痛い。
「わかった、わかった。名前で呼ぶから、泣き止めって」
「……本当ですか？」
「あぁ。嘘はつかねーよ、知空」
そう言えば、泣き止むと思いきや、
「本当に呼んでくれたぁ」
とまた泣き出してしまったのだ。これには俺ももうお手上げだ。
「頼むから泣き止んでくれって」
この後、感極まった知空が泣き止むまで一時間近くかかった。その間、周りからの目線に晒されながら……。俺の方が泣きてぇよと思っていた。
そんなこんなで俺は民警として、働けるようになった。ちなみに俺のＩＰ序列は十五万台だ。蓮太郎ペアの序列は十二万台。当面、蓮太郎ペアが目標とすることにする。

「これであとは武器だけになったな。ドミネーター……どうなってんのかねぇ」

この数日後、俺のもとにドミネーターの改修終了の知らせが届いた。

第６話：ドミネーター復活

俺はドミネーター改修終了の知らせを受け、蓮太郎と共に司馬重工へ向かっていた。ちなみに知空は必死に説得し天堂民間警備会社に留守番している。

「そういえば、司馬未織ってどんなやつなんだ蓮太郎」

「未織は俺の銃の弾丸の都合や延珠の靴を開発してくれた人だ。ちなみに俺は未織との交換条件で今の高校に通ってるんだ。あと、木更さんとは犬猿の仲でな、二人揃うととんでもない化学反応を起こすんだよ」

「とんでもない化学反応ねぇ……見たいとは思わねぇな」

などと話しているうちに司馬重工に着いた。蓮太郎について中へ入って行く。研究室のような分析室のようなところに入ると女性が居た。

「貴方が滕秀星さんね。ドミネーターの改修、無事終わりました。それにしてもなんなんあれ？とんでもない技術の塊やん。本当にデータ消さなきゃいけんの？」

ヤバいな、これが守られないとなると……。

「それが、約束だろ未織。それは譲れねぇよ」

「里見ちゃんのいけず、別にええやないの」

「駄目だ。これは俺の仲間の頼みだ、絶対に守ってもらう」
　不満を言いながらも結局はデータを消去してくれた。俺は約束を守ってくれた二人に感謝した。ちなみに基本情報のデータは先に渡していたが、そのデータも消去してくれた。
「それでこのドミネーターなんやけど、結論から言うと従来のスキャン機能がガストレアの脅威判定になって、それに加えて音声認識による形態変化を行えるようにもしたんよ。スキャンだとガストレアのステージⅠ～Ⅲがエリミネーター、ステージⅣがデコンポーザーってのが目安やで。対人の場合はスキャン機能が使えなくなってるから考えて使ってな」
　やっぱりスキャン機能は使えねぇか……ただ、ドミネーターが音声変換て、反則だろ。
「ああ、わかった。でも、ドミネーターはシビュラにリンクしてないと使えねぇよな？それとデコンポーザーの弾数はどうなったんだ？」
「あぁ、それな。室戸先生とうちらがが協力して作ったデータベースを使っとるんよ。ガストレアの脅威判定はそこから読み取った情報と照合して出るんや。それとデコンポーザーに関しては弾数は五発にしたんよ。基本的な依頼でステージⅣ以上は滅多に出ないからその弾数で大丈夫や。」
「そうだったか……ホントありがとよ、司馬ちゃん」

「ふふ、どういたしまして。うち、滕ちゃんも気に入ってしもうたわ。これから武器のことは相談してな」
「マジかよ。ありがとよ司馬ちゃん」
「ふふふ、任せてや。二人とも木更に愛想尽きたらうちの民警部門に来てな。あと、滕ちゃんこれ」
　そう言われ渡されたのはバラニウム製の大剣と小太刀だった。
「これは、知空ちゃんの武器や。滕ちゃんのペアにも期待してるで」
　再度お礼をいい俺たちは司馬重工を後にした。天童民間警備会社に帰っだ頃、日は沈みすっかり夜になっていた。俺は知空を連れモノリスの外に向かった。目的はもちろんドミネーターの試し打ちだ。夜であれば基本的にガストレアの動きは少ない。それに俺たちのペアに足りないのは圧倒的に実戦経験だ。それを補う目的でもあった。
「ラッキー、ちょうど討伐依頼が出てんじゃん」
　ちょうどモデルラットのガストレア討伐依頼が出ていた。ちなみに討伐といっても死体を研究用検体として回収するため、殺しっぱなしではないが。
「知空、いけるか？」
「怖いですけど、滕さんが居ればいけます」
「変なこと言ってんじゃねーよ。じゃ、行くぞ」

こうして、俺らは初の実戦へ向かった。そこで、東京エリアを揺るがす元凶となる者たちに出会うとは知らずに……。

第７話：初の実戦と現れる道化師

「ちっ、見つからねぇな」
「なかなかいませんね、モデルラットのガストレア……」
　俺たちは今、依頼のためモノリスの外に出ている。しかし、いくら探してもガストレアはいなかった。確かにそこまで広域の調査はしていないが、ただの一体もガストレアに遭遇しないのはおかしいってのは俺でもわかった。
「もう少し森にはいるか」
「わかりました」
　森の奥に入ると夥しい数のガストレアの死体を見つけた。何故こんなところに死骸が？
「おいおい、どうゆうことだよこりゃ」
「わかりません。ただ嫌な予感がします」
「ああ、同感だ」
「ヒヒッ、いい勘してるねぇ、民警くん」
　急に背後から声をかけられた。俺は咄嗟に知空を抱え前に飛び、後ろを向く。そこに

は、仮面をつけたピエロのような男がいた。
「いい動きをするようだねぇ、民警くん。ふむ、君は普通の民警とは違うようだね。目が違う」
「……何者だてめぇは」
「おっと、こわいこわい。私は蛭子影胤。そして、君の後ろにいるのが……」
「蛭子小比奈、１０歳」
「私の娘だよ」
　いつの間にか俺たちは後ろに回り込まれていた。このまま、戦いになれば確実にこちらが不利だ。
「なぁ影胤さんよ、この死体の山はあんたらがやったのか」
「その通りだよ、君たちにも……死体になってもらおうかねぇ」
　そう言った瞬間に殺気を感じた。俺はすぐにドミネーターを蛭子影胤に向ける。
〈携帯型脅威判定鎮圧執行システム、ドミネーター改起動しました。ユーザー認証、滕秀星執行官。公安局刑事課所属、使用許諾確認。適正ユーザーです〉
「知空、戦闘だ。お前はそこのちっこいのを頼む」
「わかりました」
「ヒヒッ、その銃はなんなのだい？やはり君は何かが違うようだ」

「……答える義理は、ねぇ」
パラライザーと言い、影胤を撃つ……が、壁のようなものに阻まれ電撃はそれていった。
「なん……だと」
「面白い銃を持っているねぇ。私は君に興味を持ったよ。君の名前を教えてくれないかい、民警くん」
「……俺は、縢秀星だ」
「縢秀星、ね……覚えておこう。では、今日は退こうかね。いずれまた会おう、縢くん」
そう言い蛭子影胤、小比奈は帰って行った。
「……助かった……のか？」
「みたいですね」
「次また会おうみたいに行ってたよな、あの仮面野郎。はぁ、めんどくせぇ予感しかしねぇ」
「全くの同感ですね」
「はぁ……まぁ、今は依頼をこなすか」
少し休み、本来の目的であるガストレアを探しに行く。数十分探したところでモデルラットのようなガストレアを三体ほど見つける。

「やっと見つけられたみてぇだな。知空、いけるか？」
「もちろんです、滕さん」
「なら、知空は手前の一体を任せる。俺は残りの二体をやる。手前のを倒したらすぐに下がってくれ」
「わかりました」
そう言うやいなや、知空は敵に突っ込んで行く。俺は、その隙にドミネーターをガストレアに向ける。
〈ステージIガストレア。執行モード、リーサル・エリミネーター。慎重に照準を定め対象を排除してください〉
ドミネーターの指向性音声を聞き、ガストレア二体を撃つ。撃たれたガストレアは悲鳴のような咆哮をあげながら爆ぜた。
「……さっきとは違いますね……まさか、ガストレアを一撃で殺すなんて」
ドミネーターの力を見た知空が驚いて呟いた。目には怯えの色が見て取れる。
「すげぇだろドミネーター、こいつが俺の相棒だ。怖いか？」
「……はい。それが敵側にないのが幸いですね」
「はっ、そりゃあ違いねぇな」
知空の発言に軽く鼻で笑うが、実際敵がドミネーターを持っているとなると笑っ

てられるような話ではない。
「まぁ、ドミネーターを一から作るのは無理みてぇだし、俺みてぇなやつが現れることがない限り大丈夫だ」
　俺みたいなやつってとこで知空の目には疑問の色が見えたが、ドミネーターの生産が不可能とわかった安堵が強いようで、それ以上追及してくることはなかった。
　こうして、俺たちの初の実戦は終わった。戦闘の後、知空が切り殺したガストレアの死体を研究所へ送り、俺たちは家に帰った。

第８話：束の間の平和

「今日は疲れましたね、滕さん」
「全くだ、ホント疲れたぜ」
俺たち二人は帰ってきてすぐソファにダイブしそのまま今まで寝ていた。本当に今日は疲れた。初めての実戦に謎の仮面男との遭遇。疲れない方がおかしい。
「……にしてもよ、あの仮面野郎はなんだったんだろうな」
「そうですね、嫌な予感しかしない人たちでした。それに、蛭子影胤も小比奈もおそろしく強いと思われます。今の私たちでは高く見積もっても勝率５％ぐらいでしょう」
ドミネーターが効かないとなると辛いのだ。エリミネーターでも効くかどうか……デコンポーザーを使うしかないのか……。
「ああ、俺も直感的にやべぇって感じたぜ。それにあの仮面野郎はパラライザーを防ぎやがった。あれが何なのかも気になるな」
「天童社長に報告しますか？」
報告は一応しておくべきだろう。この情報を一人で抱え込んでも事態が悪化するだけの気がする。

「そうだな、一応しておくか。まぁ、今日は寝ようぜ」
「そうですね。私、疲れて眠いです」
「俺もだ。ふあぁ……じゃ、おやすみ」
「おやすみなさい、滕さん」
　こうして俺と知空は朝までぐっすりと眠った。

「んっ、ふあぁ」
　俺は翌日、１２時に目が覚めた。まだ疲れは癒えていないが木更ちゃんに昨日の報告があるため疲れた体を起こした。ふと近くを見ると知空は幸せそうに眠っていた。
「はぁ……まぁ、今日はゆっくり休んでろ」
　俺は知空を起こさないようそう呟いた。それから支度をし家を出た。もちろん、知空が心配するといけないので書き置きはしておいた。

　天童民間警備会社に着き、木更ちゃんに昨日の報告をした。
「流石だわ、滕くん。初の実戦にも関わらず上々の成果ね。どっかの甲斐性無しの里見くんと違ってしっかりとお金も貰ってきたし」
「うるせぇよ、木更さん。俺だって意図的に忘れてたわけじゃねぇよ」

おいおい、蓮太郎は金をもらい忘れたのかよ……。
「もしそうだったらクビよ。そんなことより、気になるのは仮面の男とその娘ね……そんな話聴いたこともないわね」
「やっぱり知らねぇか」
「う～ん、こっちで一応調べておくわね」
「ああ、頼んだ」
「じゃあ、疲れてるだろうし今日は帰っていいわ。ゆっくり休んで頂戴。これからもよろしくね、滕くん」
「わかった、ありがとよ。じゃあ、今日は帰らせてもらうぜ」
お言葉に甘え俺は家に帰った。自宅に着くと知空が料理を作っていた。
「あっ、滕さんおかえりなさい」
「ただいま……って知空、料理作れたのか？」
「少しですけど…。じっと待っているのが落ち着かなくて」
そのまま料理を作る知空と数十分話していた。料理ができ、食べてみるとこれが割と美味い。
「うめぇな、知空。お前にこんな才能があるなんてな。じゃあ、今度は俺が料理を作ってやるよ」

「本当ですか！では、楽しみにしていますね」

その後、ＴＶを見たり、話したり、風呂に入ったりで今日という日が終わっていった。

真夜中、俺はふと目が覚めた。最近よくこんな風に目が覚め前の世界を思い出す。最高の仲間がいたあの世界を。シビュラの牢獄の世界を。しかし、今俺が生きているのはこのガストレアに脅かされている世界だ。俺はしばらくこの世界で生きるしかない。シビュラの牢獄ではなくモノリスに守られた仮初めの平和を享受する牢獄の世界で。

「この世界にも最高のダチってのができたからな。あいつらが頑張るなら俺だって不義理はできねぇ。まぁ、俺もなんとか頑張るしかないわな。めんどくせぇけど……」

独りそう呟いた。

それに蓮太郎と木更ちゃんにはなんだか嫌な感じがした。蓮太郎は危うい感じで、木更ちゃんからは何かへの憎悪を感じた。それらがこの先命取りにならなければいいが…。

そう考えながら再び眠りについた。

第二章　偽りの平和と道化師

登場人物

～天童民間警備会社～

☆滕　秀星（かがり　しゅうせい）

２１歳、元公安局刑事課一係所属執行官

シビュラの中枢にて公安局局長である禾生　壌宗（かせい　じょうしゅう）にドミネーターのデコンポーザー・モードで撃たれた。しかし、目が覚めるとそこは見知らぬ世界であった。その後、天童民間警備会社に入社し民警となる。ＩＰ序列は十五万台。武器はドミネーター改。

・ドミネーター改

携帯型脅威判定鎮圧執行システム。大型の拳銃の外見をしており、登録された監視官と執行官だけが使用可能。低殺傷弾を撃ち出すパラライザー、殺傷弾を撃ち出すエリミネーター、最大威力の分子分解銃のデコンポーザーの三種のモードがあり、パラライザー以外では銃が変形する。犯罪係数の計測に変わり、ガストレアに対してはデータベースの情報を元に変形するようになった。また、登録者の音声認識による変形も可能

である。

☆祀　知空（まつり　ちそら）

１０歳、モデル・ムーンベアのイニシエーター。滕の相棒。滕に初めて会った時、自分を助けてくれた彼に憧れを抱き彼のイニシエーターとなる決意をする。その後、聖天子に直談判するなどの奇行にはしった。普段は心優しくあまり戦いに参加しないが怒るとかなり危険。武器は基本的に小太刀、本気（激怒）時は大剣。

☆里見　蓮太郎（さとみ　れんたろう）

１６歳、勾田高校２年生。天童民間警備会社のプロモーター。普段は４０口径仕様のＸＤ拳銃と天童式戦闘術で闘う。ＩＰ序列は１２万３４５２位。

☆藍原　延珠（あいはら　えんじゅ）

１０歳、モデル・ラビットのイニシエーター。蓮太郎の相棒。司馬重工製の特殊な靴を履いており、靴底に仕込まれたバラニウムと延珠の脚力を加えた蹴りは強固な甲殻に覆われたガストレアをも粉砕するほどの威力を持つ。

☆天童　木更（てんどう　きさら）

１６歳、天童民間警備会社の社長。天童式抜刀術の免許皆伝の剣鬼。抜刀術では刀が触れもしない１０ｍ先の物まで切断できる。

〜三ヶ島ロイヤルガーター〜

☆伊熊　将監（いくま　しょうげん）
ＩＰ序列１５８４位の凄腕プロモーター。柄までバラニウムで作られた身の丈ほどの巨大な大剣を軽々と振るえる筋力の持ち主。
☆千寿　夏世（せんじゅ　かよ）
モデル・ドルフィンのイニシエーター。伊熊とペア。穏やかな性格で、戦闘向きの能力が低い代わりにＩＱ値は高く、ペアの頭脳として働く。
〜司馬重工〜
☆司馬　未織（しば　みおり）
勾田高校生徒会長。世界に名立たる巨大兵器会社・司馬重工の社長令嬢。一目見た瞬間から連太郎が将来大物になると感じ、パトロンとして蓮太郎・延珠ペアの装備品を条件付きで無償で提供している。木更とは犬猿の仲で、同じ空間に置いておくと撃ち合い・斬り合いの喧嘩になる。
〜その他〜
☆室戸　菫（むろと　すみれ）
年齢不詳、四賢人と謳われた世界最高の頭脳を持つ天才の１人。「神医」という二つ名も持つが、現在は重度の引きこもりにして死体愛好家。

☆聖天子（せいてんし）
１６歳、東京エリアの３代目統治者。木更と同じ美和女学院に在籍しているが、統治者としての多忙さから滅多に登校できない。しかし、首席を取るほど学力は高い。
～???～
☆蛭子　影胤（ひるこ　かげたね）
タキシードにシルクハット、笑顔を浮かべた仮面と、ふざけた格好をして大量殺人を繰り返す男。何やら計画をしているよう。
☆蛭子　小比奈（ひるこ　こひな）
蛭子影胤の実娘。モデル・マンティスの元イニシエーター。黒いドレスを纏い腰にバラニウム製の小太刀２本を携える。

第9話：嫌な予感

今日は休暇の日であり、家でのんびりとしていたのだが朝の蛭子影胤と思われる男の出現情報を木更ちゃんからの電話で伝えられたため急遽、天童民間警備会社に出社していた。

「木更ちゃん、今朝の報告は本当なのか？」

「ええ、本当よ。昨日、里見くんがモデルスパイダーのガストレアを倒したんだけど、依頼があった部屋で仮面男と遭遇したみたいの」

仮面の男といえば蛭子影胤。そう思わせるほどにあいつは強い印象の男であった。

「……蛭子影胤だったのか？」

「わからないわ。名乗りはしなかったみたいなの。ただ、滕くんの言ってた特徴とほとんど一致してたみたい」

「そうか……つくづく嫌な予感がする野郎だな」

「そうね……。ただ、他にも気になることがあるの」

これを聞き、蛭子影胤の件とは別に嫌な予感を感じる……。

「里見くんが倒したガストレアは感染者なの」

「おいおい、ってことはまさか」
「そう。感染源ガストレアは見つかってないの」
　つまり、感染源ガストレアは今この時間も東京エリアに潜んでいるのだ。下手をすれば、明日には街がガストレアで溢れかえるかもしれないのだ。嫌な予感どころではない。
「マジかよ……アテはあんのか？」
「それが同業者に探りを入れても全然情報なし。ちなみに里見くんは室戸先生の意見を聞きに行ってるわ」
「そっか……俺はいつでも狩りに行けるようにしとくわ」
「ええ、お願い。感染源も私たちで狩りたいわ」
「りょーかいですよ、社長」
「フフ、ありがとう滕くん。そうそう話変わるんだけどね、里見くんがガストレア倒したのはいいけど報酬貰って来なかったの」
　これを聞き、俺は盛大に呆れる。幾ら何でも報酬を貰い忘れるはねーって蓮太郎……。これで何回目だよお前。
「またかよ。蓮太郎……バカなのか」
「やっぱりそう思うわよね！」

この後、雑談が続き正午過ぎぐらいに帰宅した。

家に帰ると知空が昼食を作って待っていてくれた。
「お帰りなさいです、滕さん。昼食を作ってあるので一緒に食べませんか?」
「おっ、ありがとよ知空。じゃっ、食べよーぜ」
そうして2人で昼食を食べる。知空の料理はやはり美味い。最近はよく知空が料理を作ってくれるのだ。
「今日も美味ぇな、知空」
「それは良かったです!でも、早く滕さんの料理食べたいです……」
「じゃあ、今日の夕食は俺が作ってやるよ」
いつも食べさせてもらってるし、約束もあるし、いっちょやるか。
「本当ですか!すっごく楽しみにしてますね!」
「あんまハードル上げんなよ」
ここで一旦会話がきれた。数秒の沈黙の後、知空が口を開いた。
「今日、天童民間警備会社で何の話をしてきたのですか?」
知空はやはり鋭い子だ。おそらく俺の雰囲気の違いに気付いたのだろう。
「…昨日、蛭子影胤が現れたらしい」

「そうですか…でも、それだけじゃないんですよね？」
　どうやらかなり鋭いようだ。ってか、ここまでくると聡いの方が合ってるか？はぁ、本当はあまり言いたくないんだがな。
「……ああ、昨日感染者を出した感染源ガストレアが見つかっていないらしい」
「……そう……ですか……」
　知空は顔を暗くし俯いた。
「怖いか？」
「はい……でも、滕さんと一緒なら大丈夫です」
「そうか……感染源ガストレアだが、蓮太郎と一緒に俺らで倒すぞ」
「わかりました滕さん」
　とは言っているものの知空は震えている。やはり、怖いのだろう。初めて会った時もガストレアを見て怯えていた子なのだから。
「おうおう、無理すんなよ知空」
　そう言って知空のわしわしと頭を撫でる。本当に俺は変わったと思う。
「ありがとうございます、滕さん。私、頑張りますから」
　そう言い抱きついてきた。「なんだ、やっぱ怖いんじゃん」と思ったが口には出さなかった。

「影胤も気になるっちゃ気になるけどまずは感染源ガストレアだ。やるぞ知空、俺らでな」

そう、確認するように言うと知空は

「はい！」

と力強く返事した。気になることは沢山あるが今は目の前のことを片付けよう。蛭子影胤はその後だ。

しかし、俺はもっと考えるべきだったのだ。感染者の部屋に蛭子影胤が現れたことを。つまり、この事件は蛭子影胤と何らかの繋がりがあるということを。

第１０話：近付く災い

「ったく、なんで俺がこんなとこに」
「文句を言わないでください。聖天子様の呼び出しなのです、断れませんよ」
「はぁ、だり～」
　そう文句を言いつつ俺たちは、聖天子様が出した召集令に従い庁舎に来ていた。第一会議室と書かれた部屋に入ると、蓮太郎がチンピラみたいなやつに絡まれていた。
「どうしますか、滕さん？」
　と知空が聞いてくる。そんなもんからかうに決まってるっしょ。
「おいおい、どうしたよ蓮太郎。虐められてんのか？」
「うっせーよ滕」
「おい、なんだテメェは」
　どうやら蓮太郎に絡んでいたチンピラは俺に矛先を向けたようだ。めんどくせぇな、まぁこいつもからかってやっか。
「名前を聞くならまず名乗れよ、脳筋野郎」
「ムカツクなテメェ」

「へへっ、そりゃどーも」
　俺がそう言うとチンピラは俺に頭突きをする。しかし、俺はそれを普通に避けた。当たるかよバ～カ。
「避けんてじゃねーぞテメェ。挨拶ぐらい受けろや」
「んな挨拶ごめんだね。誰が野郎の頭突きなんか受けるんだっつーの。かわいこちゃんのなら受けるけどよ」
　俺がそう言うとチンピラはキレたのか俺に斬りかかろうとする。これだから脳筋野郎は……と思いつつ対処しようとする。しかし、
「やめたまえ将監！」
　室内の卓に腰掛けていた男が一喝しチンピラを止めた。そのままチンピラと少し言い合いをしていたが、最終的にはチンピラは引き下がった。ざま～ねぇぜ。

「里見くんも滕くんもここで問題起こさないでよ」
「滕さんは火に油を注がないで下さい」
　俺と蓮太郎はさっきのことで木更ちゃんと知空に小言を言われた。
「あの大男はおそらく伊熊将監よ。ＩＰ序列は千五百八十四位」
「マジかよ。なかなか強いんだな、あの伊熊ってやつ」

そうは言ったものの正直、見た感じコウちゃんの方が凶暴だし強い気がする。まぁ、コウちゃんは頭もいいから比べるだけ無駄だが……。そう思い一人笑う。皆には言ってもわからないだろうから言わないけど。

「そろそろ始まるみたいよ」

そう木更が言ったので前を向くと特大パネルに聖天子が写っていた。席に座っていた人たちが一斉に立ち上がる。

『ごきげんよう、みなさん』

場にいた全員が驚愕している。当たり前だ、いきなり国家元首がモニターに映ったのだから。

『楽にしてくださいみなさん、私から説明します』

こうして、今回の依頼の説明が始まる。依頼内容はつまるところガストレアに取り込まれたケースの回収だ。その程度の簡単な依頼に対する膨大な報酬に疑問を感じたのだろう、木更ちゃんは聖天子に質問をしている。

質問の途中、室内に突然笑い声が響いた。

『誰です』

「私だ」

声のした方を見るとそこには蛭子影胤が居た。

「おいおい、マジかよ。何であいつが」
「戦いますか、滕さん？」
「……待て知空。今はまだだ」
そう言いつつ俺はいつでもドミネーターを撃てるように、ノンリーサル・パラライザーを起動する。
娘の小比奈まで現れた。話を聞くも、レースにエントリーだの七星の遺産だのわけのわからないことを言っている。
我慢の限界なのか、伊熊将監が蛭子影胤に攻撃を加えるも蛭子影胤は無傷。場にいた全員が放つ銃弾も跳ね返される始末だ。ヤバい、これはマジでヤバいやつだ。そう感じ、ドミネーターをリーサル・エリミネーターのモードにして蛭子影胤を撃つ。しかし、また壁に阻まれ当たらなかった。
「ちっ、エリミネーターまで効かねぇのかよ。おい、蛭子影胤。そいつは何なんだ？」
「おやおや、滕くんじゃないか。久し振りだね。」
最後にヒヒッと笑いを付けて言ってきた。
「御託はいい。そいつは何だって聞いてんだ。」
「これは斥力フィールドだ。私は『イマジナリーギミック』と呼んでいるよ」
「斥力フィールドだと？」

「そうだ。もっともこの力を得る代償に内臓のほとんどをバラニウムの機械に詰め替えているがね。改めて名乗ろう滕くん、里見くん。元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊『新人類創造計画』蛭子影胤だ」

これに会場の人々は驚いた。後から聞いた話だが、『新人類創造計画』とは立ち消えたはずの計画らしい。んな、びっくり人間計画みたいので成功例が生きてるってだけで驚くっつうのに牙を向いてきたとあっちゃあ、政府も真っ青だろうな。

「今日はこの辺で失礼させてもらうよ、民警諸君」

そう言い蛭子親子は窓を割り消えていった。

それを見届け会場は一気に荒れ始める。

『静粛にッ!』

しかし、聖天子が澄んだ声で会場を静めた。

『事態は尋常ならざる方向に向かっています。みなさん、あの男より先にケースを回収してください。ケースの中身は七星の遺産。悪用すればモノリスを破壊し東京エリアに〝大絶滅〟を引き起こす封印指定物です』

「マジかよ……」

俺の嫌な予感は最悪の形で現れたのだ。

第11話：奪われた鍵

あの会議から数日後、遂に感染源ガストレアが見つかった。木更ちゃんはドクターヘリを使い、蓮太郎を空路で向かわせたようだ。

俺と知空は今、木更ちゃんから送られてきた位置情報をもとに陸路から感染源ガストレアを追っている。理由は単純、空と地上つまり上下での挟み撃ちだ。感染源ガストレアの真下近くに辿り着いたが、急に感染源ガストレアが墜落していった。おそらく延珠が上から蹴りをいれたのだろう。

「俺たちは援護だ、行くぞ知空」

「はい」

正直、今の里見ペアは心配だ。延珠は蓮太郎の家を飛び出し、何処かへ行っていたと聞いてるからだ。戻っては来たようだが、果たしてしっかりと連携が取れるだろうか……。それに一番の懸念は蛭子影胤だ。おそらく奴はこの情報をどこかで仕入れているはずだ。つまり、必ず何処かで襲って来るはず、その点を含め今の里見ペアでは危険なのだ。

「急ぐぞ知空、嫌な予感がしやがる」

「はい、私も嫌な感じがします……」
数分走り蓮太郎のもとへ辿り着いたが。どうやら感染源ガストレアは無事倒したようだ。その姿を見て安堵するも束の間、蓮太郎は影胤に顔を掴まれ地面に叩きつけられた。延珠も影胤の娘に斬りつけられている。
「やべぇな、くそっ」
そう悪態を尽きながらドミネーターを取り出し、エリミネーターと言い影胤に向かって放つ。しかし、またもや斥力フィールドとやらに阻まれエリミネーターは影胤に届かなかった。思わず舌打ちをする。
「……ちっ、ホントに効かねぇな」
「ヒヒッ、まさか滕くん達まで来るとはね。いやぁ、厄介だねぇ」
「蓮太郎、延珠ちゃんと一緒にケースを持って逃げろ。ここは、俺と知空で止めてやるからよ」
正直、この二人を止めるには骨が折れるがこのケースが手に入れば今回の騒動は収束する。ここが正念場なのだ。しかし、蓮太郎は逃げなかった。
「延珠、周りの民警を呼んできてくれ。周りの援軍もあればこのイカれたやつも潰せんだ」
延珠は反対していたが、蓮太郎は半ば強制的に行かせた。おそらく何を言っても蓮太

郎は退却しないだろう。あまり気が進まないが共に戦うしかない。
「厄介なことしてくれるねぇ。君達を殺さなくてはいけなくなるじゃ無いか」
「んな簡単に死なねーよ。だろっ、蓮太郎、知空」
「……ったく、お前は……死ぬなよ」
「わかってんよ！」
「滕さん、蓮太郎さん来ます！」
「やれやれ、ならば私も少々本気を出すよ。マキシマム・ペイン」
影胤がそう言った瞬間、俺と連太郎は近くにあった岩に叩きつけられた。知空は少し離れたところにいたため技を受けなかったようだ。だが、俺たち二人はあっけなく倒れる。情けねぇ……。
「随分とあっけなく倒れるのだね」
「パパァ、こいつら斬っていい？弱いくせに邪魔ばっかするし」
「ヒヒッ、好きにしなさい」
「やった、じゃあ……斬る」
そう言い影胤の娘は俺たち二人を斬りにきた。しかし、俺たちに刃が届くことはなかった。影胤の娘は刃が俺たちに届く前に吹き飛ばされた、大剣を持った知空によって。

「私の、私の大切な人たちに……何をやっているの？……貴方たちは、赦さない」
　どうやら知空は激怒しているらしい。知空のモデルはツキノワグマだ。熊だけあってパワーが凄まじい、しかし知空は普段その力を使わない。激怒した時以外は。
「なんだいその力は？君は戦いをあまりしない娘だと思っていたのだがねぇ」
「ウルサイ、吹き飛びなさい」
　そう言い、知空は大剣を振るい影胤をガードした斥力フィールドとごと吹き飛ばしてしまった。かなり遠くに飛ばされただろうから、ここへ戻るには時間が掛かる。更に延珠ちゃんが呼んだ援軍も到着した。
「これで俺たちの勝ちだな、蓮太郎」
　俺は、そう言うが蓮太郎は何も言い返さない。どうしたんだ？
「どうしたんだ、蓮太郎？」
「……ケースが……ない」
「はっ？だって、さっきまですぐそこに……」
　さっきまであったはずの場所にケースは……なかった。
「おいおい、嘘だろ。影胤は知空に吹き飛ばされながら持ってったってことか？」
「ああ、多分な……最悪の事態だ」
「マジ……かよ……」

蛭子影胤親子は撃退したにも関わらず災厄は着実に俺たちのもとへ近づいていた。

第１２話：探索と合流

「あ～、やっぱモノリスの外は気味悪いねぇ」
「そんなこと言わないでくださいよ、滕さん。私だってこんなとこ君悪くていやですよ」
「はぁ、まぁ俺らが影胤の野郎を逃がしちまったんだから仕方ねぇんだよな」
「そうですよ」
今、俺たちはケースを奪っていった蛭子影胤を追跡するためにモノリスの外にいるのだ。

蛭子影胤との戦いの後、俺と蓮太郎はダメージからか倒れ病院に搬送されていた。搬送先の病院で木更ちゃんから蛭子影胤の居場所とＩＰ序列元１３４位ということを教えてもらった。更には聖天子からの指名もあり、すぐに作戦に参加することになった。
そのため現在、俺と知空はモノリスの外にいた。ちなみに蓮太郎は別の場所から探索に出ている。
「蓮太郎たちは大丈夫かねぇ」
ふと心配になった。

「蓮太郎さんも延珠ちゃんも強いから大丈夫ですよ、きっと」
「……そうだな」
　こんな風に喋っていると突然、重低音の爆発音が森に響き渡った。俺は思わず舌打ちをする。
「ちっ、どっかのバカが爆発物を使いやがった。ガストレアが起きるぜ、気をつけろよ知空」
「はい、滕さん」
　俺たちの会話とともに森に足音や咆哮が響き渡る。どうやらガストレアたちが起き出したようだ。本来、モノリスの外つまり未踏査領域では、ガストレアに見つからないようにするため音を立てないのが鉄則だ。そんな時、森の木々の隙間からこちらを見る赤い目を見つけた。どうやら見つかったらしい。
「見つかったな、知空どうする?」
「周りに他のガストレアはいません、下手に逃げて別の敵が来ても厄介ですし、ここで倒しましょう」
「オッケー、敵さんも来たみたいだな」
　森の木々を掻き分け、大きなトカゲのようなガストレアが現れた。俺はそれを見るや否やドミネーターを起動させる。

〈携帯型脅威判定鎮圧執行システム、ドミネーター改起動しました。ユーザー認証、滕秀星執行官。公安局刑事課所属、使用許諾確認。適正ユーザーです〉

ドミネーターの指向性音声を聞きながら、ガストレアにドミネーターを向ける。その時、ちょうどガストレアは突進しようとしていた。

〈ステージⅢガストレア。執行モード、リーサル・エリミネーター。慎重に照準を定め対象を排除してください〉

ドミネーターの形態変化を確認し一発撃つも右前足に当たり、ガストレアの右前足が弾け飛ぶ。そのためか、ガストレアはバランスを崩し前のめりに倒れる。

「ちっ、流石にエリミネーター一発じゃ無理だな。はぁ、ちょ～っとドミネーターの本気出しちゃおうかな～」

そう言い、俺はデコンポーザーと言う。俺の言葉を認識したドミネーターは形態を変える。

〈執行モード、デストロイ・デコンポーザー。対象を完全排除します。ご注意ください〉

ドミネーターの指向性音声を聞き、銃口に形成された光球を右足を再生しつつあるガストレアに向けて撃つ。見事に命中した光球はガストレアの上半身を消し飛ばした。これにより頭と心臓を消し飛ばされたガストレアは完全に沈黙した。その光景を見た俺が

「ひゅ～、やっぱりドミネーターの本気は痺れるね～」
　なんてことを言っていると知空が呆れた顔で
「それは結構ですけど、デコンポーザーの弾数は大丈夫なんですか？」
　と聞いてきた。こう聞くのは仕方ない、ドミネーターのデコンポーザーは装弾数は５発。下手に撃っていいものではない。
「ん？大丈夫大丈夫、ここに来る前に未織ちゃんとこに行って補充バッテリーもらって来たからな」
　そう言いリュックの中身を知空に見せ、ニシシと笑う。
「そうですか、まぁいいですけど」
　そう言いつつ、知空は呆れていた。俺はそれを見なかったことにし散策を続けた。

　しばらく歩き続けると茂みが途切れ、明らかに人工物と思われる石造りの建物を見つけた。中から明かりが漏れていた。
「知空、警戒しとけよ」
「はい」
　小さな声で言葉を交わす。そして、明かりが漏れている窓のようなところのすぐ下に行き、立ち上がると同時にドミネーターを構えたら。既にドミネーターはパラライザー

だ。
「動くな！……れ、蓮太郎！」
　そこに居たのは蓮太郎だった。どうしてこいつがここに？
「か、滕か？どうしてここに？」
「それはこっちのセリフだぜ、蓮太郎。とりあえず、無事みたいだな」
「ああ、滕お前もな」
「蓮太郎さん、その方は？」
　長袖のワンピースにスパッツの女の子が俺のことを蓮太郎に問い掛ける。
「こいつは滕秀星、俺のダチで仲間だ」
「そうですか……なら安心です」
「蓮太郎、その娘は？」
「ああ、こいつは伊熊将監のイニシエーターの千寿夏世だ」
　伊熊っつうとあの脳筋野郎か。この子とあいつとがペアとか似合わねぇ。
「ほぉ～、あの伊熊のねぇ。まぁ、よろしくな夏世ちゃん」
「はい、よろしくお願いします」
　さて、挨拶もしたし蓮太郎をからかってやるか。
「んなことより蓮太郎、木更さんに延珠ちゃんまで居んのにまだ足りねぇのかよ」

「ばっ、そんなんじゃね～よ。こいつはここで会っただけで」
「はいはい、そーゆーことにしといてやんよ」
「滕、お前……」
蓮太郎が俺をじとっと見てきたが知らんぷり知らんぷり。
この後、知空と延珠が合流。更には夏世のプロモーターである伊熊将監の通信から蛭子影胤の潜伏先が判明。早々に休憩を切り上げ潜伏先へ向かった。

第１３話：戦闘開始

「……この先が蛭子影胤の潜伏先なんだよな、蓮太郎」
「そうみたいだな」
俺たちが合流してから少し後に伊熊将監から通信があり蛭子影胤の潜伏場所が判明し、そこへ向かっていた。
現在、俺たちは蛭子影胤の潜伏先であろう教会を見下ろせる小高い丘にいる。
「……周りの様子を見るにどうやら作戦は始まってるみたいだな」
辺りを見回し蓮太郎が言った。周りには携帯食料が捨てられていた。夜明け前に出たことから、どうやら奇襲を試みたようだ。
「行ってこいよ蓮太郎、俺はここに残るぜ」
「私も残ります」
俺の発言を聞き知空も残るようにするようだ。それを聞き不思議に思ったのか蓮太郎が問いかけてきた。
「ああ、だが何でここに残る?全員で攻めた方がいいだろ」
「周りをよく見ろよ。俺たちを追ってガストレアが来てるぜ」

そう、俺たちが出た森の方には闇の中に多数の赤い目が輝いていた。どうやらいつ俺たちを襲おうか探っているようだ。

「なっ」

蓮太郎は驚いているようだ。まさか、気付いていないとは。たまに抜けてんだよなこいつ。

「せっかく蛭子影胤を倒したってのにガストレアに囲まれて全滅、なんてことは流石に嫌だぜ」

「……なら私も残ります」

今まで会話に参加していなかった千寿夏世も足止めに回る気みたいだ。千寿夏世の発言を聞き驚いた蓮太郎が声を上げる。

「おいおい、待てよ。なんでお前まで」

「影胤のもとへは沢山の民警が向かっています。ですが、足止めは今のところ立った二人……この場合、私がここに残りガストレアの足止めをすることが最良案だと思います」

「……くそっ、わかったよ。三人とも死ぬなよ。行くぞ、延珠」

「ああ、わかった蓮太郎」

蓮太郎と延珠は教会へ向かって行った。蓮太郎、任せたぜと心の中で呟く。声に出さ

ないのは、正直恥ずかしいからだ。
「千寿夏世だったよな？いいのかよ、行かなくてさ」
「理由なら先ほど話しましたよ、滕さん」
「ちげーよ、お前のペアのことだ」
「将監さんは……たぶん大丈夫です」
「本当にいいんですか？」
　心配そうに知空が聞いた。その問いに千寿夏世は薄く笑ながら答えた。
「はい。なんだかんだ言ってきっと生きていますから、将監さんは……」
　あんなプロモーターでも信用してんだな……。
「そうかよ……なら俺はお前を死なさないようにするか」
「へ、変なことを言わないで下さい。里見さんといい、貴方といい理解できません。大抵の人は私達、イニシエーターを道具扱いするのに……」
「……俺はな、幼い頃にとある理由で施設に送られた。その施設暮らしが嫌だった俺はとある機関の猟犬になった。そん時の上司からの待遇が今の呪われた子供たちに似てんだよ」
「猟犬ですか？」
「ああ。だけどよ、新人で入ってきた女の子がな、俺たち猟犬を人間扱いしたんだ。そん

なやつ初めてで驚いたぜ。初めて上司をダチだって思えたんだ。今の俺はそん時の上司と同じ立場だ。俺はその女の子みたいになってみてぇって思ったんだ」

せっかくの二度目の人生だ。自分の好きなように生きてぇしな。

「そう……ですか」

おそらく何のことかはわかってないだろう。しかし、俺が言いたいことはわかってくれたようだ。

「滕さん、来ます」

千寿夏世と話していたら唐突に知空が言ってきた。どうやら戦闘開始らしい。俺はドミネーターを構える。

〈携帯型脅威判定鎮圧執行システム、ドミネーター改起動しました。ユーザー認証、滕秀星執行官。公安局刑事課所属、使用許諾確認。適正ユーザーです〉

「はぁ、めんどくせぇけどやるか。……死ぬなよ知空、夏世」

「はい！」

「は、はい！」

いきなり呼び捨てされたためか千寿夏世は少し驚いていた。俺は、その様子を見て薄く笑いながらガストレアにドミネーターを向ける。

〈ステージⅢガストレア。執行モード、リーサル・エリミネーター。慎重に照準を定め対

象を排除してください〉

指向性音声を聞きながら数発ガストレアに撃つ。一撃で倒せなくても数発当てれば殺すことはできるのだ。

こうして俺たち３人によるガストレアの足止めが始まった。

第１４話：地獄と光の槍

俺たちは今、戦っている。

「次、虎型ガストレア来ます」

千寿夏世が叫ぶ。

「りょーかい」

「わかりました」

俺と知空がそれを聴き、返事を返し戦う。その繰り返しだ。

辺りには千寿夏世のワイヤートラップや銃撃で殺されたガストレア、知空に切り刻まれたガストレア、そしてドミネーターの餌食となり上半身がないガストレアの死体が散乱していた。

「あと少しじゃないでしょうか?」

周りの様子を見た知空が言う。実際、この周辺にいるガストレアはあと少しだ。ただ、この戦闘音で寄ってくるガストレアもいる可能性があるので必ずしもあと少しで終わるとは限らない。

「見た感じはな、けど警戒は怠んなよ」

「はい！」
　知空は返事しつつガストレアを切りつける。そのまま戦い続けているといつの間にかあと一匹になっていた。
　俺はドミネーターを最後の一匹であろう狼型ガストレアに向けて構えた。
〈ステージⅢガストレア。執行モード、リーサル・エリミネーター。慎重に照準を定め対象を排除してください〉
　この音声を聞くのは何回目だろうと思いながら、狼型ガストレアの両前足、頭、胸部を連続して撃つ。撃たれたガストレアは上半身が破裂し動かなくなった。
「ふぅ～、これで最後みたいだな」
「みたいですね、戦闘音で寄って来たガストレアも居ないみたいです」
　知空の言葉を聴き思わずその場に座り込む。
「あぁ～、疲れた」
　ドミネーターの予備バッテリーもあと残り僅かであり、このまま戦いが長引けば大変なことになっていた。
「まったくですよ、滕さん。でも、周辺にガストレアは居なくなったみたいですね」
　そのまま知空と話したが、ふと千寿夏世が気になり振り返る。千寿夏世は蛭子影胤がいるであろう教会の方を見ていた。俺は千寿夏世の方へいき、

「やっぱり伊熊将監が気になんだろ？」
と聞く。当たり前だ、曲がりなりにも相棒なのだから。
「……はい……」
その答えを聴き、
「じゃあ、行くか。蓮太郎の援護も必要かもしれねぇしな」
「えっ、でもまだ周辺にガストレアが居ないと決まったわけじゃ……」
俺は千寿夏世の言葉を遮るように言った。
「確かにそうだが、俺たちの戦闘音で寄って来たガストレアは居ねーし、知空が近くに潜むガストレアは居ないって言ってんだ大丈夫だろ」
知空の感知は意外に正確なのだ。だからこそ信じられるのだが。
「ですが、万が一のことが……」
「うっせーよ。気になってんだろ？周りにガストレアは居ねーし、俺もお前も仲間を助けてぇ、条件は揃ってんだろ」
それでもまだ反論して来たので埒が明かないと思った俺は、千寿夏世の腕を掴みそのまま連れて行く。
「つべこべ言ってねーで行くぞ。知空、行くぜ」
「はい、滕さん！」

こうして、俺たちは蓮太郎の援護に向かった。

戦闘場所に着いた時、そこには地獄が広がっていた……。

「……そ、そんな……」

知空が呟いた。俺たちは蓮太郎たちの援護のため教会周辺に駆けつけたが、そこには多数の民警の死体があった。死体の中には伊熊将監も居た。千寿夏世はふらふらと伊熊将監の死体へ向かう。

「そんな……将監さん……」

そう言いながら千寿夏世は伊熊将監の側にへたり込んだ。

「マジかよ……伊熊将監はＩＰ序列が千番台だろ……いくら相手が元百番台つってもここまで違うのかよ……」

……嫌な予感がする……。おそらく蓮太郎がヤバい。

「知空、はやく蓮太郎のとこに行くぞ」

「はい、急ぎましょう」

「……私も行きます」

俺たちの話を聴き千寿夏世が言ってきた。

「待てよ、ここからは危険だ。お前は伊熊将監のそばに居ろ」

「危険だからこそ味方は多い方が良いのでは?それに、将監さんの仇を取りたいんです」
俺は千寿夏世の目を見た。彼女は決意した者の目をしていた。おそらく止めることはできないだろう。パラライザーで気絶させてもいいが、下手をするとガストレアが来てアウトだ。
「……わかったよ。ただ、死ぬんじゃねーよ」
俺はしょうがなく認めた。
「はい……場合によりますが」
最後の言葉は聴こえないように言っていたみたいだが、バッチリ聴こえた。はぁ、こいつも気にかけなきゃいけねーな。
そんなことを考えていると銃声が聞こえた。たぶん、音が聞こえた方が戦場なのだろう。
「知空、夏世さっきの聞こえたよな?行くぞ!」
「はい!」
「……わかりました」
そうして音がした方に走っていくと客船が見えた。そこから、銃声が聞こえてるようだ。俺たちはあと少しだと思い、足を速める。
蓮太郎たちが戦っている客船に到着し蓮太郎たちを見つけた時、蓮太郎は…蛭子影胤

の光の槍に貫かれていた。
「嘘……だろ……」
俺は思わずそう呟いた。

第15話：撃破

蓮太郎を光の槍で貫いた蛭子影胤は、何らかの気配を感じたのか俺たちの方を見た。どうやら俺たちに気づいたようだ。

「おやおやぁ、滕くんじゃないか。丁度、蓮太郎くんを倒したのだが……次は君がくるのかい？」

蛭子影胤は、言葉の最後にヒヒッと笑いながら言ってきた。俺は、へっと鼻で笑い答える。

「それもいいなぁ蛭子影胤。たが、蓮太郎はまだやられちゃいねぇぜ。」

「何を言っているんだい滕くん。彼は確かに……何ッ」

蛭子影胤は蓮太郎の方を向き驚いた。そう、蓮太郎はまだ死んでなかった。よろよろとした手つきで自分に四本もの注射器で何かを注射していた。

注射器を射った蓮太郎は、射った直後から変化が起こった。胸郭が膨れあがり、骨が異様な音を立てる。体は痙攣し、腹に空いた穴がぼこりと音を立て再生が始まった。

血がこぼれ、肉が盛り上がり、腸が垂れ、神経が結合し、体温が失われ、骨が再構成され、細胞が死滅しながら再生する。

蓮太郎の体は恐ろしい速度で死に、凄まじい勢いで生き返って行く。そして、
「ツヅ、ーあああああああああああああああああああああああッッッ!!!」
蓮太郎は天に向かい絶叫しながら立ち上がった。
「里見くん、君は一体……」
蛭子影胤は思わず呟いた。この一幕の間に俺たちは蓮太郎たちがいる船に入り、甲板に上がっていた。俺は、復活した蓮太郎を見つけた。
「待ってたぜ、蓮太郎。お寝んねタイムはもう十分だよな？」
俺の言葉を聞き、蓮太郎の虚ろだった目にしっかりと光が宿る。
「うっせーよ、滕。やるぜ、協力してくれるな？」
俺は笑みを浮かべる。そして、蓮太郎とアイコンタクトを交わす。
「とーぜん。行くぜ知空、夏世！」
「はい！」
「了解しました！」
まず夏世が蛭子影胤と小比奈に銃を撃つ。当然、二人は回避し影胤が二丁の銃を撃ち、小比奈は夏世に切りかかってきた。小比奈の斬撃を知空が大剣で止め、そのまま上へ跳ね飛ばした。
「お前、なまいき」

小比奈はそう言い知空に小太刀を投げようとする。
「させません！」
そこへ夏世が銃を連射し小比奈の動きを制限する。銃撃により空中で動きを制限された小比奈に俺はドミネーターを向ける。モードはパラライザーだ。しっかりと電撃が当たり小比奈の意識は一撃で沈んでいった。
ふと、俺は蓮太郎たちを見た。蓮太郎は影胤の光の槍を拳打により止めていた。俺はドミネーターにデコンポーザーといい影胤の横の方へ走る。
「蓮太郎、しっかり決めろよ！」
そう叫び、走る間に構成した光球を影胤に向け放った。
「何度やればわかるんだい、滕くん。私にはこんなものは効か……何ッ」
どうやら影胤は今までのパラライザー、エリミネーターとデコンポーザーの違いに気付いたようだ。何とか光球を回避した。しかしもう遅い、俺たちの狙い通りだ。
「ヒヒッ、惜しかったねぇ、滕くん。うまくいけば私を倒せていただろうに」
「それはどうだろーな。よく見てみろよ、お前のイマジナリーギミックってやつをよ」
「……私の斥力フィールドが消失してるだとッ」
そう、デコンポーザーは斥力フィールドの前面を部分的に抉り取ったのだ。斥力フィールドが消失し驚愕した影胤に、光の槍を耐えた蓮太郎がゼロ距離で雲嶺毘湖鯉鮒

をあて打ち上げる。
「決めろ、蓮太郎！」
打ち上げられた影胤に蓮太郎の隠禅（いんぜん）・哭汀（こくてい）・全弾撃（アンリミテッド・バースト）発が直撃する。直撃を受けた影胤は水柱を立て海に沈んでいった。一方、蓮太郎も技の威力を殺し切れず地面に激しく打ち付けられた。
俺は影胤が沈んだ海水面を観察する。影胤は海に沈んだままだ。どうやら俺たちは勝ったらしい。
「俺たちの勝ちだぜ、蓮太郎」
「あぁ、みたいだな」
そこへ俺たちの通信機の無味乾燥な電子音が響いた。二人とも通話モードにする。
『生きてるみたいね蓮太郎くん、縢くん』
通信機から聴こえてきたのは木更の声だった。
「ああ、二人とも無事だぜ木更ちゃん」
『本当に良かったわ。ただ、悪いニュースがあるの……』
「悪いニュース？」
思わず俺と蓮太郎の声が被る。悪いニュース……ぜってぇヤバいやつだ。
『落ち着いて聞いてね……ステージⅤのガストレアが姿を現したわ』

最悪の事態だ……。

第１６話：スコーピオン、沈ム

「蓮太郎、後は任せたぜ。ここは俺たちが死守してやんよ」
「……わかった。死ぬなよ滕、二人共」
そう言い蓮太郎は線形超電磁投射装置、通称『天の梯子』の中へ入っていった。
影胤を倒した後、木更ちゃんによりステージⅤガストレア、ゾディアック『天蠍宮（スコーピオン）』の出現を聞いて俺たちは愕然とした。しかし、木更ちゃんの考案した作戦を聞き、俺たちはそれに賭けることにした。
作戦と言うのは『天の梯子』によるスコーピオンの討伐だ。『天の梯子』は直径八百ミリ以下の金属飛翔体を亜高速まで加速され撃ち出すことができる。弾丸をバラニウム鉱石にすればスコーピオンでも倒すことができるのだ。
そこで、蓮太郎ペアは『天の梯子』の起動、俺たちは『天の梯子』の防衛をすることにした。『天の梯子』は稼働中、凄まじい轟音が響くはずだ。これは未踏査領域の野良ガストレアを呼び寄せる可能性を意味している。
「起動してからが勝負だぜ知空、夏世」
「わかってますよ、滕さん」

「はい、発射まで死守すればこちらの勝ちです。何とか守り抜きましょう」
「ああ。でもな夏世、守り抜くだけじゃねぇ、俺たちも生き残るぞ」
「ッ……」
俺の言葉で夏世は驚き、一筋の涙を流した。
「おいおい、何で泣くんだよ」
「あ～、夏世ちゃん泣かした～滕さん」
知空はそう言い、俺をじと目で見てくる。俺が目線を逸らすと、知空は夏世に向き直り優しく語りかけた。
「でもね夏世ちゃん、滕さんの言う通りだよ。三人で生き残ろう！」
「……全くあなた達は。今までの私は道具だったのに……どう反応すればいいのかわかりませんよ」
そう呟き、夏世は腕で涙を拭い宣言した。
「わかりました、みんなで生き残りましょう！」
言い終わった数秒後、起動のサイレンが響き渡り、多数のガストレアが森の中より現れる。知空は大剣、夏世は銃火器、そして俺はドミネーターを構える。
「戦闘開始、全員生き残れよ！」
「「はい！」」

俺たちは『天の梯子』防衛戦を開始した。

ガストレアの第一波を防ぎきった時、突如『天の梯子』からけたたましいアラート音が鳴り出した。

「大丈夫なのでしょうか？」

「どうする滕さん？」

「今まで通り防衛を続行、蓮太郎ならやってくれるさ」

頼むぜ、蓮太郎……そう心の中で呟いた。

あのアラートから少し経ち俺たちは徐々に追い詰められはじめた。理由は単純、球切れだ。

「くっ、まだかよ蓮太郎……第二波までは耐えられるが、第三波は無理だぞ」

「大丈夫だよ滕さん、私が何とかする」

知空がそう言い大剣でガストレアを薙ぎ払う。知空の奮戦でなんとか第二波を凌いだ。しかし、今だに俺たちが劣勢であることは変わらない。そんな時、遂に『天の梯子』による射撃が行われた。

「やったんだな蓮太郎……」

俺はそう呟く。そして、光がすべてを包み込む。視界がはっきりとして見えたのは、スコーピオンがバラバラになって海に沈んでいく様子だった。

第１７話：等価交換

「はぁ……俺はこーゆーとこは一生無縁だと思ってたよ」
「それは私もそうですよ滕さん」
　俺たちは蛭子影胤、小比奈ペアそしてゾディアック『天蠍宮（スコーピオン）』の撃破功績を讃えた式典で聖居に来ていた。もちろん主賓は蓮太郎だが。
「しっかし、俺たちは戦果ってほどのことはやってねぇよな」
「確かにそう思いもしますが……ただ、影胤ペアとの戦闘において斥力フィールドの除去、スコーピオン狙撃時の『天の梯子』防衛は両方の撃破において重要事項ですから。所謂、ナイスアシストってことですね」
「そーゆうもんかねぇ……」
　そう、知空が言った功績のため俺たちは『一級戦果』の評価を受けた。ちなみに蓮太郎ペアは両撃破の直接的要因のため『特一級戦果』だ。ただ、知空の言い分もわかるが、撃破補助をしただけの俺らにここまでの戦果を与えるだろうか？まぁ、それだけ両撃破が東京エリアにとって重要事項だったということだろう。
「式典が始まるみたいだな。じゃあ、ちょっくら行ってくるわ」

「はい、いってらっしゃい滕さん」
こうして式典が始まった。

蓮太郎の表彰の前が俺の表彰だった。
「よう、聖天子様。前に会った時も思ったが結構かわいいんだな」
小声で軽口をたたく。聖天子はこのようなことへの耐性がないのか少し頬を赤らめ、
「ありがとうございます」
と言った。そこからは形式的な表彰だった。最後に式典の後、自分のもとに来るように耳打ちされたが……。ちなみに俺の序列は今回の戦果で千五百番まで上がった。

この後、蓮太郎が聖天子に食ってかかるという会場をどよめかすようなバカな行為をしたものの無事式典は終了した。俺は言われた通り聖天子のところに向かった。
「突然呼び出した無礼をお許し下さい滕さん」
「あんたもこんなことすんだな。なんだ、駆け落ちか？」
そうニヤけながら言うと、
「ッ……ふ、不潔です」
とこれまた頬を赤らめながら言ってきた。やっぱりこういうことへの耐性はないみ

たいだ。聖天子は咳払いをし、話を始めた。
「今回の滕さんの戦果には未踏査領域における大量のガストレア討伐は含まれていません。しかし、現地の調査を行った者から非公式ではありますが何か報酬を与えるべきとの報告を受けました」
「マジかよ……まぁ、確かに数えられないくらいは倒したけどよ」
「流石に序列の上昇は不可能ですが、何か望みはありますか？」
「序列の上昇以外はなんでもいいのか？」
「限度はありますが」
「じゃあ、元伊熊将監のイニシエーターである千寿夏世を俺のイニシエーターにしてくれ」
「それは知空さんとの契約を破棄して新規に、という意味ですか？」
「いいや、知空との契約は続行だ。それに加えて新たに夏世とも契約する」
　この発言を聞き聖天子は眉を顰め動揺した。当たり前だ、イニシエーターの二重契約は前代未聞なのだから。
「何故、千寿夏世さんを？」
「あいつは腕が立つし頭がいい。……それにあいつは、夏世は昔の俺に似てるからな」
　そう昔、俺が猟犬として、いや使い捨ての道具にされていた時に。だから俺は、今ま

での監視官とは違う新任の監視官を気に入っていた。この世界では俺がそうなりたいのだ。

「……そう、ですか。わかりました了承します。しかし、それならば追加で条件があります」

「なんだ？」

「今から約二ヶ月後ですが菊之丞さんが不在になります。そのため、各エリアからの接触が予想されます。滕さん、貴方にはその時、私の護衛を頼みたいのです」

「そんだけでいいのか？」

「はい」

「わかった。じゃあ、俺の方も頼むぜ」

そう言い、俺はその場から去る。次の日、正式に通達が送られ俺と知空は夏世を迎えに行った。最初は渋っていたが、知空の説得もあり夏世は我が家に来ることになった。

知空の希望で我が家で夏世の歓迎会を開いた。もちろん料理は俺が作ったが、夏世に信じられないという目線を向けられた。……失礼な。

こんな平穏があの時、軽い気持ちで了承した二ヶ月後の約束により崩されるとは思ってもいなかった……。

???―❶

今は夜。暗く不気味な雰囲気が漂う未踏査領域の港には、三人の人影があった。一人は白衣を着ている中年男性であり死んだ魚ような目をしている。もう一人はスーツを着ている長身の男性で、歳は若く見え鋭い眼光を宿している。そして、最後の一人は黒を基調とした服を着た青年という言葉が似合うような男性だ。

「やっと見つけましたよ、これがゾディアック『天蠍宮（スコーピオン）』。世界でも十二体しか存在しないという特別なステージVガストレアですか」

白衣の男性が港に打ち上げられたゾディアック『天蠍宮（スコーピオン）』の破片を見つけ、嬉々とした表情で呟いた。白衣の男性は、興奮気味にスコーピオンの破片を調べ始めた。傍目から見ると白衣の男性は興奮し過ぎて不審者を通り越したレベルだ。これは研究者の性なのだからであろうか。長身の男は呆れ気味に、青年は少し笑みを浮かべその様子を眺めていた。

白衣の男性の調査が一段落し青年が白衣男性に声をかけた。

「どうだい、いい調査結果を取れたかい？」

それを聞き振り向いた白衣の男性の目は妖しく輝いていた。

「ああ、実に興味深い。ゾディアックのサンプルなど中々に手に入るものではないからね。これで、通常ガストレアとの相違の検査もできる。十分な体液も入手できたから通常ガストレアと同じように体液による感染があるのかも調べられるよ」

白衣の男性は笑みを浮かべながら答えた。その様子を見て長身男性はため息をついた。

「それはよかった」

「それに、ここに来る途中や『天の梯子』の周辺にあった大量のガストレアの死体。あれもなかなか使えるサンプルだよ。なんであんな所にあったかは知らないが実にありがたい。流石に何回もガストレアの検体採取依頼は出せないからね」

そう言いながら白衣の男性はスコーピオンの破片を弄っている。その様子は、研究者と言うよりむしろ新しい玩具を見つけた子供と言う方が正しいように思える。

白衣の男性は、スコーピオンを見つけてから一時間程度で全ての調査を終わらせた。調査が終わった後、白衣の男性はいつも通りの死んだような目に戻っていた。

「どうやら、全ての調査を終わらせたみたいだね。僕は君の力になれたかな?」

「ああ、ありがとう神威(かむい)。君のおかげでまた一歩計画の成就に近づいたよ」

そう言った白衣の男性は歪んだ笑みを浮かべた。

「どういたしまして栗花落(つゆり)博士。ではそろそろ帰りましょうか。さぁ行くよ影虎(かげとら)」

そして彼らは未踏査領域に広がる闇に消えていった。三人がいた場所では、弄り尽くされグチャグチャになったゾディアック『天蠍宮(スコーピオン)』の破片が月の光を浴び、妖しく光っていた。